



岡 芳 包 先 生 を 偲 ん で

岡 芳包先生は、平成3年9月1日、急性心不全のため急逝されました。享年76歳でした。楽しみにされたイタリア旅行から帰国直後の思いがけない出来事でした。先生は大正4年に大阪市でお生まれになり、当時秀才だけに許された飛び級の制度によって小学校5年から大阪府立市岡中学校、さらに中学校4年から浪速高等学校に入学されました。昭和12年に大阪帝国大学医学部を御卒業、直ちに医学部副手として、生理学第一講座で教育・研究の道に入られました。翌13年から15年まで東北大学金属材料研究所に留学され、低温物理学の実験的研究を通して温度測定法や熱力学の基本的知識を修得されました。再び大阪大学医学部生理学講座に復帰して助手に任命されました。先生にとってこの仙台留学は大変楽しく、またいかに貴重なものであったかは、何回となく聞かされた本多光太郎先生の口ぶりや、当時貴重品であった液体酸素、液体窒素中での物性変化の面白い話などからよく窺えました。昭和18年には講師、続いて20年に助教授に任命され、

兵役は免れたものの、戦時研究員として高空における飛行士の低圧耐性に関する研究を命ぜられ、太平洋戦争も末期に近づいた物資欠乏の中で戦災に合いながら、随分苦勞されたということです。

戦後間もない昭和23年7月、弱冠34歳で新設の徳島医科大学教授に就任され、初代教授として生理学講座を担当されました。当時、陸軍の旧木造兵舎を改造した実に粗末な研究室で、試験管1本、ピーカー1個すら不自由するような状況から出発して、とにかく学生実習だけは、創意工夫で何とかやり遂げなければならぬという決意で教育に当たられました。このためか先生の教えを受けた助手連中は、実験器具の手作りだけは人後に落ちない自信をつけました。昭和26年に新制大学の発足に伴い徳島大学教授となり、後に生理学第一講座を担当されました。42年に医学部長に就任されましたが、43年から学園紛争が激化、徳島大学も例外ではなく、翌44年には過激派の学生による教室の封鎖があって本当に苦勞されたようです。学部長在任中

には、歯学部設置が具体化したため、その準備にも心血を注がれました。50年から日本学会会議10, 11期会員に選出され、国際学術交流委員会委員・生理科学研究連絡委員会委員等を歴任され、特に我が国での国際会議開催の後援には力を注がれました。54年に徳島大学長に選任、徳島大学に於ける学術行政の要として、多大の業績を上げられました。鳴門教育大学の新設に際しては、地元の国立大学長であるため設置準備委員長に任命され、文部省との折衝、学長の選考に没頭し、現在見られるような同大学発展の基礎を築かれたことは知る人の知るところです。

先生の日本生理学会への貢献の中から主なものを挙げてみます。まず昭和33年から37年まで中国四国地方会を代表する常任幹事に選ばれました。35年4月には山野俊雄教授と共に当番幹事として徳島の地で第37回日本生理学大会を開催されました。さらに再度当地で、松本淳治、井上五郎、高田 充の三教授を当番幹事とする第58回大会(昭和56年)が開催された折りは、学長として全面的にこれをバックアップされました。生理学会と関連が深い学会として、昭和28年に四国での国民体育大会に合わせて第8回日本体力医学会大会を開催し、また57年から63年まで同学会の評議員会長を務めました。この間、同学会の四国地方会を設立し、その後ずっと会長を務めてられました。これらの貢献により、昭和61年に日本生理学会特別会員、昭和63年に日本体力医学会名誉会員に推薦されました。

研究面における先生の業績の一端に触れてみたいと思います。若くして大阪大学在任中は、故久保秀雄教授のもとで酸化還元指示色素等、各種物質の酸化還元電位の測定に従事されました。殊に肝臓の電位測定は生体組織を対象として実施された最初の測定でした。これと前後して当時唯一の測定機器であるボムカロリメーターを用いてアミノ酸の熱含量等の熱力学的パラメータを測定されました。その測定の精度が画期的で、ずっと後に他の学者が別の進んだ方法を用いて求めた測定値と較べても遜色がなく、現在に至るまで国際的評価に耐えています。

徳島大学へ赴任後は研究方向を変えて細胞生理学の研究を始められました。当時この領域に関心を持つ人は非常に少なく、奇異の目で見られたこともありました。しかし現在、この分野の研究は専門的に多彩な分化を遂げ、隆盛を極めていくことからみて、先生の先見性に驚かされます。当時の経済事情を考慮して、顕微鏡一つあればできる実験として阻害剤を用い、植物細胞を含む数種の細胞の有糸核分裂を維持するエネルギー供与の解明を始めました。その結果、分裂期の前半と後半では供与機構が違うことを確かめました。研究を推進する上で、組織培養が必須であることに気づ

き、早くから培養に目を付けて手掛けてこられました。従って、その後の研究は培養細胞を主な実験材料として同調分裂法の確立から、同調細胞を利用した細胞周期における ATP レベル、酸素摂取、乳酸生成で代表されるエネルギー代謝量の経時的变化の測定に進み、国際的評価を得ました。

いま一つは体力医学の研究です。この研究も初期には「あま」の体力測定と「あま」作業の疲労の研究から始まり、重量挙げ等の各種スポーツにおける体力測定に移りました。これと並行して、やはり先生の先見性を示すものですが、心電図のテレメトリーの研究を世界に先駆けて開始しました。まだ真空管全盛の時代でありましたが、送信・変調・受信の装置を自作し、心電図情報を FM 中波に乗せた無線搬送法を開発されました。トランジスターの普及に伴って装置は次第に小型化されました。トラックやフィールドに属する各種スポーツに応用して、束縛されない状態で心機能変化を観察しましたが、研究結果は大きい反響を呼び、外国の専門書に引用されて高い評価をうけました。この方式は後に FM 水中電流を用いるユニークな潜水時の心電図搬送法に発展し、現在に受け継がれています。

このように全く次元の異なる細胞生理学と体力医学という2つの分野の研究を同時に実施されましたが、先生の頭の中で両者が矛盾なく同居していたようです。しかも、将来、両者が密接な関係をもって一つにドッキングし、相乗の効果を発揮する時が来るに違いないという考えと論理を持っていられたようです。

先生は非常に緻密な頭脳を持ち、その言動は正確無比、且つ合理的でした。他方、常に自由闊達で談論風発、些細な事にこだわらない大きい人間性をお持ちでした。ご自分でもよく言われた通り、書くことよりもしゃべる方が得意で、且つお好きでした。いつも人生に余裕を持ち、自ら進んで日の当たる処へ出られ、他人にもそうしろと勧められました。そして悠然とした生涯を過ごされました。学問に対する基本的な考えもこの原則に立ち、ゆったりと正面から学問を楽しんでいられたと思います。先生のお好きな言葉に菜根譚から抜粋した「清にして能く容るる有り、仁にして能く断を善くす」があります。達筆で酒の好きな先生はほろ酔い加減でよくこの詞を色紙に認めました。誠に味わいの深い言葉ですが、行うにはこれ以上難しいことはありません。しかし、努めてこの主旨に沿うよう心がけてられました。いまその先生は、大阪市にある阿家の菩提寺で安らかな眠りにつかれています。

稿を終るに当たり、ありし日の先生のお姿を偲び、心から御冥福をお祈りします。

(宮本博司)